

介護福祉実践の理論化技法の開発に関する研究

A study about the development of the theorization technique of the care and welfare practice

佐藤 富士子, 是枝 祥子, 川延 宗之, 町田 章一, 丹野 真紀子, 藏野 ともみ, 金 美辰,
佐々木 幸, 青柳 佳子, 藤江 慎二, 菅野 衣美

人間関係学部人間福祉学科

キーワード: 介護実践, ソーシャルワーク実践, 福祉専門職, 介護実践評価方法

1. 研究の目的

介護及びソーシャルワークは「実践の科学」といわれるように、対象者の心身の状況に応じて個別に提供される介護実践またはソーシャルワーク実践に基づき体系化、理論化されるものであり、実践そのものに研究視点が求められる。しかし、現在の現場実践においては、人材不足や福祉サービス提供体系の変化等を受け、的確で迅速な業務遂行が優先される傾向にあり、実践事例の分析や理論化の試みが十分に行われているとは言えず、理論と実践がやや乖離した状態にあると言えよう。

本研究では、「介護・福祉実践研究会」を企画し、介護職及びソーシャルワーカー(保健医療福祉相談職)から個別事例や実践課題を募り、それらに対して本学教員によって研究視点を付与し、相互交流に基づきながら共に分析することによって、介護実践及びソーシャルワーク実践の理論化と実践現場で演繹的な思考に必要な要件を明らかにすることを目的とした。

2. 活動実施報告

平成 23 年 9 月 3 日に「介護・福祉実践研究会」を企画し、4 月から本学の介護及び福祉実習で関係のある介護施設・事業所、本学介護福祉学専攻及び人間福祉学専攻卒業生に対して、事例発表の呼びかけを行った。呼びかけ件数は近隣の福祉施設 129 ヶ所、卒業生 231 名である。その結果 12 名の応募があり、その 12 名全てに本学教員が個別に「実践研究アドバイザー」として付き、提示された個別事例や実践課題について研究視点を付与し、本学での対面指導及びメール等のツールを活用して、研究方法について 6 月から 8 月までの 3 ヶ月に渡って個別指導を行った。

また、研究会と同時開催される「第 19 回日本介護福祉学会大会」と広報協力することによって、

研究報告を学会参加者にも広く公開し、介護福祉学及びソーシャルワークにおける実践と理論の融合について議論する機会を設定した。

研究会においては、介護実践分科会と福祉実践分科会を設け、研究発表と参加者である実践者との質疑応答、本学及び他大学の教員からなるコメントーターからのアドバイスを通して、実践を理論化する必要性について考察する機会となった。

研究会の参加者は、介護・福祉実践者 49 名、本学在校生 3 名、大学・専門学校教員 15 名の計 67 名であった。

また、発表者及び参加者に対して、研究発表会を通して考えられた介護・福祉実践の理論化の必要性等についてアンケートを実施し、そこから得られた結果を分析するとともに、発表者が研究を通して得られた介護・福祉現場での課題について、実践研究アドバイザーが調査に赴き具体的に取り組む方法についてアドバイスを行った。

3. 研究目標の達成状況

参加者の内、発表者と司会者を除く、介護・福祉実践者 33 名に対して介護・福祉実践の理論化の必要性についてのアンケートを実施した。

29 名からの回答(回収率 95.7%)があり、特に研究会参加動機(複数回答可)と研究発表に関する感想について報告する。

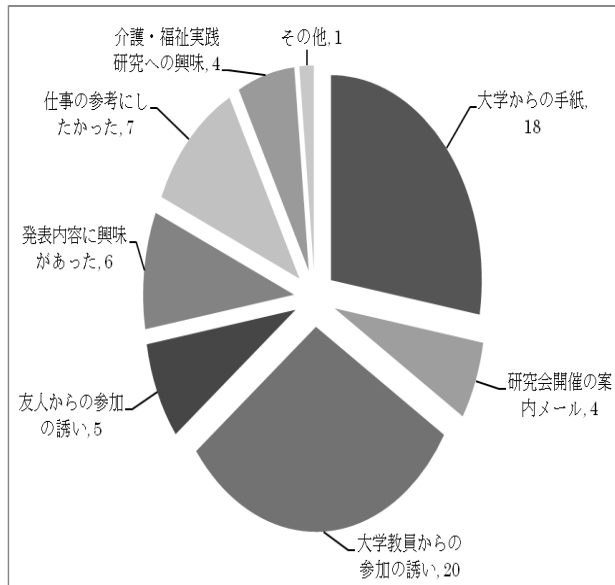
(1) 研究会参加動機

参加動機は「大学教員からの誘い」が最も多く 20 名(30.8%)、次いで「大学からの案内」18 名(27.7%)、「仕事の参考にしたかった」7 名(10.8%)、「発表内容に興味があった」6 名(9.2%)であった。

参加動機の比較的上位である「仕事の参考にしたかった」、「発表内容に興味があった」という回答からも、自らの実践への課題等を持つ実践者のニーズはあるものと考えられる。これらのことか

ら、1 人でも多くの実践者の自己研鑽の機会を提供できるよう、今後の課題としていきたい。

図 1 研究発表会参加の動機



(2)研究発表に関する感想

研究発表に関する感想を「①自分の実践をふり返る機会となった」、「②発表内容に共感した」、「③これからの実践に意欲が沸いた」、「④仕事に役立つ発見があった」、「⑤発表内容を職場で活用したくなった」、「⑥自分の実践をまとめてみたい」、「⑦来年度も研究発表会に参加してみたい」、「⑧研究発表会への参加を人にも勧めたい」の 8 項目を問うた。結果は表 1 の通りである。

表 1 研究発表に関する感想

	はい	いいえ	回答なし	計
① 自分の実践をふり返る機会になった	25	3	1	29
② 発表内容に共感した	27	0	2	29
③ これからの実践に意欲が沸いた	27	0	2	29
④ 仕事に役立つ発見があった	24	2	3	29
⑤ 発表内容を職場で活用したくなった	23	2	4	29
⑥ 自分も実践をまとめてみたい	15	5	9	29
⑦ 来年度も研究発表会に参加してみたい	25	1	3	29
⑧ 研究発表会への参加を人にも勧めたい	27	0	2	29

これらの結果から、自分の実践を振り返り、職場に役立てたい等の意欲を持つ機会となったことが伺われたと同時に、「⑥自分の実践をまとめてみたい」という項目に対し、「はい」と回答した参

加者が 15 名(51.7%)おり、実践をまとめることで自らの援助実践を見直していく必要性を感じていることが分かった。

4. まとめと今後の課題

本研究は、介護職及びソーシャルワーカーから個別事例や実践課題を募り、それらに対して研究視点を付与し、相互交流に基づきながら共に分析することによって、介護実践及びソーシャルワーク実践の理論化と実践現場で演繹的な思考に必要な要件を明らかにすることを目的としている。すなわち、「介護・福祉実践による研究方法」と「援助者自身の研究視点の獲得要件」を体系化し、現場に還元することにより、介護・福祉現場全体の質的向上を目指すことになると考える。

本年度の研究としては、研究発表を行った実践者の研究成果を現場で具体的に取組んだ結果までは分析・評価するまでには至らなかった。しかしそれは、研究による取り組みが対象者を通して明らかになるには時間を要すると共に、取り組みの評価を行うスケールの開発の必要性も新たな課題として指摘することができた。

一方で、研究会に参加をした介護・福祉実践者が、自らの実践をまとめる必要性と、それは個人のスキルの向上だけでなく、所属機関のサービスの質の向上に繋がることを認識される機会となったことは本研究の成果である。今後、実践研究の対象を拡大していくとともに、研究視点の獲得要件について検討していきたい。

5. 研究成果

1)その他（公開講座・研究会、特許、受賞、マスコミ発表等）

（公開講座・研究会）

[1]介護・福祉実践研究会, 2011.9.3, 9 時～11 時 30 分, 大妻女子大学多摩キャンパス 人間関係学部棟 7214 教室, 7247 教室 .

参考文献

- 1) 玉腰暁子, 武藤香織著「医療現場における調査研究倫理ハンドブック」医学書院, 2011 年
- 2) 平山尚, 武田丈, 藤井美和著「ソーシャルワーク実践の評価方法」中央法規, 2002 年.